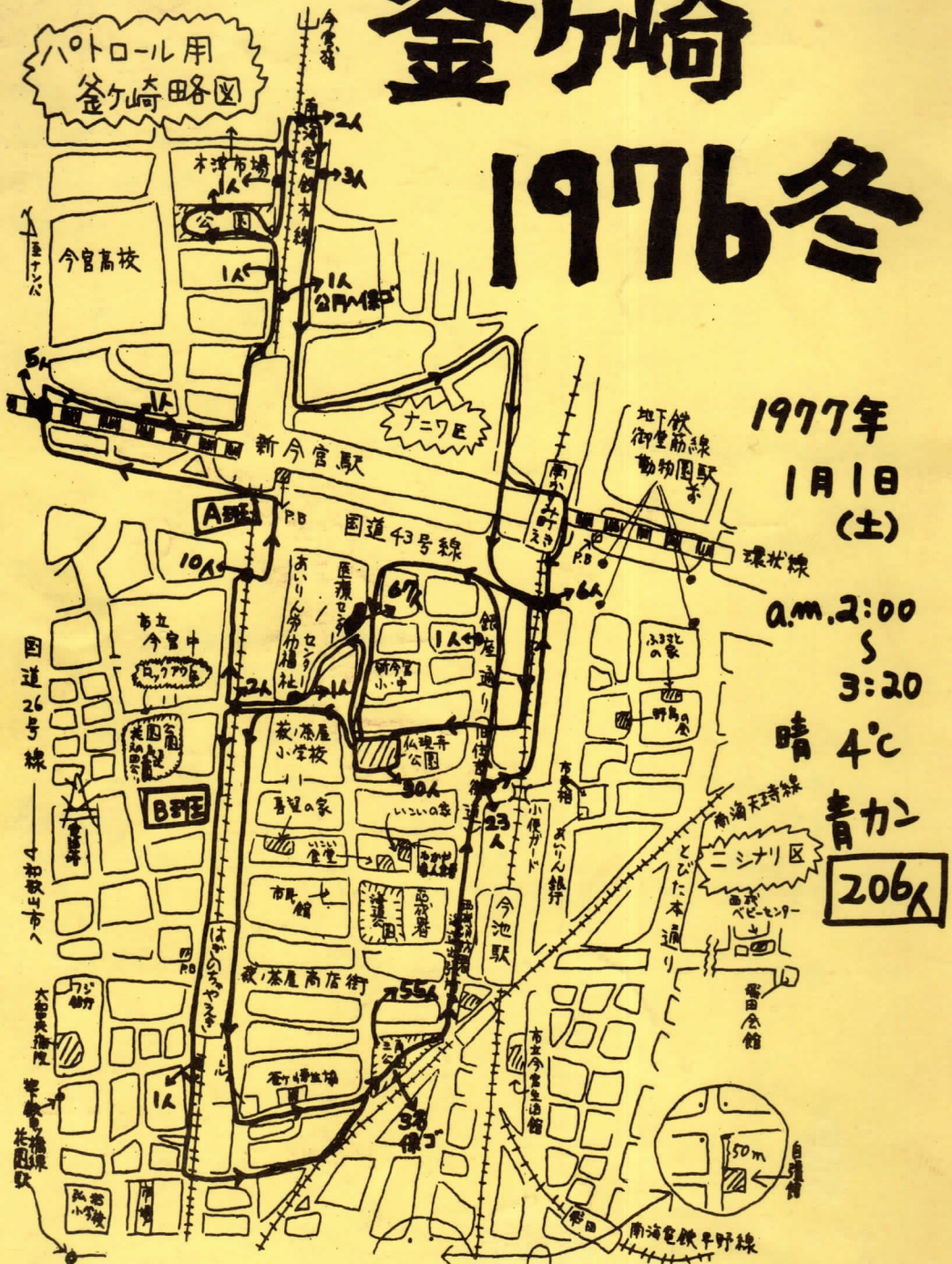


釜ヶ崎

1976冬



協友会・地域研・KUIM 越冬支援キャンプ

「釜ヶ崎1976年冬」もくじ

総括・1976年釜ヶ崎越冬・協友会・地域研・KUIIM

1976・7年の越冬対策・S.ハインリッヒ・2

私達の考えていた事、やれた事・地域研・3

交流を求めて・前島宗甫・5

第7回釜ヶ崎「越冬」支援活動を終えて・小柳伸顕・6

医療レポート・小杉邦夫・19

参加者の声

田中 豊・13 金井 愛明・13 シスター・石戸・15

岡崎美智子・15 背振 一而・16 谷 安郎・16 重野 信之・17

E・ストローム・17

越冬支援パトロール日誌より・28

資料

1. 異議申立書・35
2. 意見書・38
3. 意見書・40
4. 釜ヶ崎における越冬についての要望書・40
5. 大阪釜ヶ崎の冬にあなたの手を・43
6. 釜ヶ崎越冬支援活動中間報告・46
日刊「えっとう」・34・42

激励の手紙

代田 明美・12 明智千加子・12 佐藤 ます・26
日本キリスト教団下松教会・26 高橋 和彦・26 田中 清嗣・26
三匹のこぶた・26 高橋 隆教・27 神戸 淑子・27
中井・27

カンパ報告

表紙説明 表紙は1977年1月1日午前2時の釜ヶ崎の青カン(野宿者)の状態。
線と矢印はパトロールの道順、数字は青カンの数をあらわす。

一九七六・七年の越冬対策

石油ショック以来、不況が日本をおそってきて、特に釜ヶ崎の日雇労働者を直撃した。年末年始や冬の間、仕事がほとんどなく、越冬は深刻な問題になっている。我々協友会（釜ヶ崎で活動しているキリスト教七団体）は三年前から直接、越冬問題に取り組んできた。去年とおとはしは、我々は炊き出しを中心に越冬対策に参加した。今年にはK U I Mに引きついで一月十日より二月末まで夜間医療パトロールの責任をとった。毎晩十一時より約一時間、K U I Mや越冬実行委員会や労働者やボランティア

S・ハイブリット

（協友会代表）

と一緒に二つのグループに分れて廻り、アオカン（野宿している者）を公園のたき火や医療センター前の布団のところへ連れて行ったり、薬を与えたり、重症の場合救急車を呼んで病院へ運んでもらったりしてきた。よそから参加した多くのボランティアが身をもって釜ヶ崎の問題に接することができた。

この医療パトロールの目的は「凍死者を一人も出さない」ということだった。十二月二十五日に夜間パトロールを開始する前に、五人の労働者が路上で凍死したといういたましい事実があったのだ。その内の一人は七〇才の老人だった。

我々が約二カ月間行ったパトロールをふりかえてみると、いろいろな問題がうきばりにされて、いまなお未解決のままだといわなければならぬ。

寒波のとき、冷たい風が身を切るほど吹いた夜、布団にくるんで外で寝ている人、布団もなく土管や鋼管の中で寝ようとしている人を見ると、人間がここまで苦しんでいるのに多くの人が無関心で、自分のあったかい所にとじこもっているとは。また行政は何もしないとは一体どうしてかと痛感した。

今年の越冬のいちばん大きな問題は医療問題だった。ほとんど毎晩、病人を発見して薬を与えたり救急車を呼んだりして、できるだけのことをやろうと思ったが、問題がたくさんでた。結核患者が案外多いのに対して結核病院や病棟が減っている。そう

いう患者の受け入れ体勢ができていない。病院で差別待遇されるから、病院をいやがる労働者も少なくない。差別待遇に耐えられないで自己退院の経験の人も多い。その背景にアルコールの問題もひそんでいる。

アルコールは釜ヶ崎がかかえている大きな問題である。ここに任んでいる労働者はお酒を飲まざるをえない状況におかれている。大阪市が越年対策として十二月二十九日より一月十日まで千人以上の収容施設を開いたが、開始された日にアオカンしている者も減らなかつたし、閉鎖された日に増えもしなかつた。つまりいちばん困っている人は、その収容施設に入らなかつた訳である。施設の中で自由が束縛されることも一つの理由だが、お正月にみなゆっくりお酒を飲みたいところで、釜ヶ崎の労働者だけが二週間お酒を一滴も飲んではいけなことは無理な注文なのである。現実にお酒で体をこわしている労働者が多い。ここではアル中患者を救うことができるだろうか。「お酒をやめなさい」といっても、お酒を飲まざるをえない環境をかえて、労働者の多くの問題を解決しなかりどうにもならないだろう。ストロームさんは去年から

希望の家で断酒会を開いてアル中問題と取り組んでいるが、焼け石に水といった状態である。

仏現寺公園での炊き出しをたよりに、医療センターの前の布団の中で寝て冬を過ごした人たちのなかに、病気の人や、体の弱い人や、体の不自由な人がたくさんいるのにはおどろきました。もう労働できない体で、どこから生活費を得られるだろうか。

生活保護を受けていないし、どこかの施設に入れるほど体も自由もないこの人たちは、死ぬよりほかに仕方がないだろうか。いつもだれかによって生活しなければならぬ状態にある。自分の体が弱く悪いのに夜間

私達の考えていた事、やれた事

——地域研の越冬支援総括にかえて——

私達が「越冬」を支援するという事のなかで考えていた事は次の通りである。

一つは大阪府、市の行政の釜ヶ崎に対する対応は基本的に差別的対応であり、それは市民層の釜ヶ崎に対する差別意識を基礎としてなり立っており、従って行政に釜ヶ

パトロールに参加した労働者がたくさんいて、自分たちの仲間を助けるために一生懸命に頑張ったことに感心した。

冬が終ってあたたかい季節になったが、越冬対策中、表面に出た問題はいままも未解決のままである。しかし医療問題をいままも研究し続けて、越冬対策で入院した労働者を訪問するという形で、越冬対策を終わらないで、少しでも実を結んでいる。

越冬対策に直接参加した方、何らかの形で援助して下さった方に、心から感謝いたします。我々が少しでも釜ヶ崎の問題の解決に貢献できるように、今後ともご支援をお願いいたします。(原文のまま)

崎の対策を十分にやらせる為には、市民の側から、我々も行政が十分な対策をたてる事の必要性を感じている、という意志表示が必要だという事であった。それは同時に十分な対策をたてないまでも、公園を貸さないというような対応に歯止めをかけ、少

しても“越冬”をやりやすくする事ができるのではないかと考えた。これが、二〇幾つの教会等を支持団体として大阪市に対して要望書を提出した理由である。

しかし結果は行政の予想以上の差別性を知らされたというのが実状であった。臨時宿泊所は期間と収容数においてほんのわずかに良くなったけれども、この期間にむしろ“青カン”者が増えてきている事実は一体どういふ事なのだろうか。

以前として警備費には幾らでも金を使うが、本当の対策の為には出しおしんでいる。私達はもっとも行政に対する監視の目を年間を通して厳しく光らせていなければならぬ。

二つ目は具体的な支援としての夜間パトロール（医療パトロール）と、資金的な裏付けとしてのカンパの呼びかけである。パトロールはなによりも凍死者を出さないという事であり、又、労働者と触れ合うなかで自分の目で、体で問題の所在をさぐりあてるといふ事としてもあった。

“越冬”期間中釜ヶ崎の中を歩き回った距離は一体どれくらいになるだろう。そして、それにもかかわらず、倒れていった労

者、高令者が比較的多かった今年の“越冬”の中で、一コースかなりの道のりを足を引かずするようにしながら、それでも仲間の為にパトロールしていた労働者の事を私達は決して忘れはしないだろう。

これからの地域研の活動においても現場研修等を通じて、自分の体で事実を確かめるといふ事を大事にし彼らの遺志を引きついで行きたい。

資金カンパは主にK U I Mを中心に全国の教会に呼びかけたが、予想以上の反応があり強く私達を勇気づけてくれた。

日雇労働者の多くは農村・漁村あるいは炭鉱職者であり、市民社会から疎外され追われて来た人々である。釜ヶ崎で生まれ育って日雇をやっているという人は、ごくごくわずかである。そうである以上、一方では出発点から問題を考える必要がある。これからも、これを契機として、全国の支援者の人々と共に、十分に連絡を取りながら、多角的に取り組んで行く必要があると思う。これは又、地域研の課題の一つでもあると思う。

終りに、私達が全体を通して最も強く感じた事は、生きるといふ事、人が生きると

言う事は一体どういう事なのかと言う事であった。

釜ヶ崎においては希望に至るような真の絶望もない。常に出口と見まらぐう空間がポツカリ口を開けている。このような状況においては、生きるとは自らのおかれていく状況を変革すべく闘う事であると思う。

地域研は一九七五年一月から一九七六年二月にかけての第六回目の“釜ヶ崎越冬闘争”においてK U I Mが現場研修の一環として行った“越冬支援キャンプ”を契機として生まれた。昨年一年間は六月半ばかり識字学級を始めたのみで、何をやればいいのか暗中模索であった。“越冬”も二回経験する中でわずかながら方向が見えて来た。当面、“越冬”後も残された問題を追求しながら、労働者と共に生きる Ⅱ 闘う、集団を作って行きたい。“越冬”は冬だけではないのだから。

交流を求めて——K U I Mの現場から——

前 島 宗 甫

(K U I M越冬支援代表)

K U I Mが企画してきた現場研修が発展して、越冬支援をはじめて二回目を迎えた。この「支援」という言葉の理解も、この間私たちの中では問い直され、とらえ直されてきたように思う。私たちは釜ヶ崎の労働者との出会いの中で、自己発見を余儀なくされてきた。実にあいまいに、抑圧とか差別とか偏見とかを語り、なんとなく抽象的に終始してきた私たちの行動や論議が、具体的な出会いの中で明らかにされてきたように思う。そしてそれは、「あの人たち」の問題としてではなく、実に「私自身」の問題として実感させられ、それが連帯の基盤となってきたし、又同時に、私たちが共に解放されていくたまたかのスタートでもあった。

昨冬の越冬の後、識字字級をスタートさせた。これは、越冬期間中に配られたピラを読むことができない労働者を知ったことがその動機であった。同時に、これが労働者と私たちの具体的な交流の場となること

が期待されていた。そしてそれは、まことに小さい交流の場ではあったけれども現在まであたため続けてこられた。さらに、「労働者学校」として、新しく企画されつつある。

昨冬の越冬の反省は、労働者との交流が充分ではなかったという点であった。私たちの力量からいって二カ月余の炊き出しをキッチンと行うことで精一杯であった。「釜ヶ崎に入って来た」という「緊張感」が余裕を持たせなかったのかもしれない。

今冬は、炊き出しが釜ヶ崎日雇労働組合(昨越冬の後、昨年七月に結成)の手によって行われる見通しがついていたので、私たちは医療の問題と取り組むことにした。三百人にのぼる行路病死や六人に一人の割合で結核患者がいることや内臓疾患の人たちが圧倒的に多いことなどを聞いている。一体、どのような医療体制になっているのだろうか。この点をよく確かめてみたい気があった。

何よりも死者をださないということが最低のしかし当面では最大の目標である。生命を奪おうとするあらゆるものとたたかって「春」を待つ、即ち仕事を獲得するというのが労働者自立の第一歩である。一日平均百数十名の青カン(野宿者)をパトロールして廻ることは、これへの大きな支援になると考えた。

そして、これも私たち支援者のためのものではない。労働者自身の自立のためにパトロールをするという意義を大切にしてい、自立を目指す労働者と共に行う計画をたて、遂行してきた。このことは、交流という面で大きい進歩であったと思っている。毎夜一時間半の道のりを肩を並べて歩きながら、仲間を求め、語り、援け合う作業を通して越冬のたまたかいを考え、互の解放を考え続けた。

何人かの人たちが病院に送られ、今なお療養生活をしている。私たちはときどき時間を都合して病院を訪問し、療養している労働者たちとの交流を保ってきている。その交流の中から、私たちは何を求められているのか、何を求めねばならないのかを、少しずつとらえつつあるように思う。

「K U I M」は多くの人たちの支援と協力で、なんとか越冬にかかわりを持ちはじめることができてきた。釜ヶ崎に根をすえているエキューメニカルグループ「協友会」も着実にその働らきを伸ばしつつある。昨冬の越冬以来それに参加したボランティアを中心として生れた「釜ヶ崎地域問題研究

会」は、意欲的に問題と取り組みをしている。この三者が、それぞれの個性を尊重しながら、よい協力関係を生みだしつつある。そして、私たちの要望に応じて、さまざまな支援をしてくださった教会や団体や個人の方々に、今回も心からお礼を申しあげたい。寄せられた一つ一つの支援は、寒い

夜の活動に大きなぬくもりを与えていた。私たちはこれらの働らきを通して、教会とキリスト者が、真に人の塩、世の光としての使命をはたしてゆく希望を一層強くさせられている。

第七回釜ヶ崎「越冬」支援活動を終えて

● はじめに

一九七六年の第七回越冬を迎えるに際し、わたしたちは次の三点を支援グループとして目標に選んだ。

- 一、行政に対して要望活動を行う
- 一、炊き出しのために一〇〇万円カンパを集める
- 一、夜間の医療パトロールを行う

これらはまた前年度（一九七五年越冬）に対する支援グループとしての結論でもあった。

その経過については、釜ヶ崎地域問題研究会（以下地域研）「釜だより」第二号（一九七六年十一月一〇日）に詳しいが、九月二三日の「地域研例会」で昨年の越冬に対する一つの総括がなされ、今年もまた取り組む必要性が確認された。その結果、「越冬を考える会」が結成され具体的な取り組みが始まった。

十月二三日の「地域研例会」では、次の点が確認事項としてあげられた。

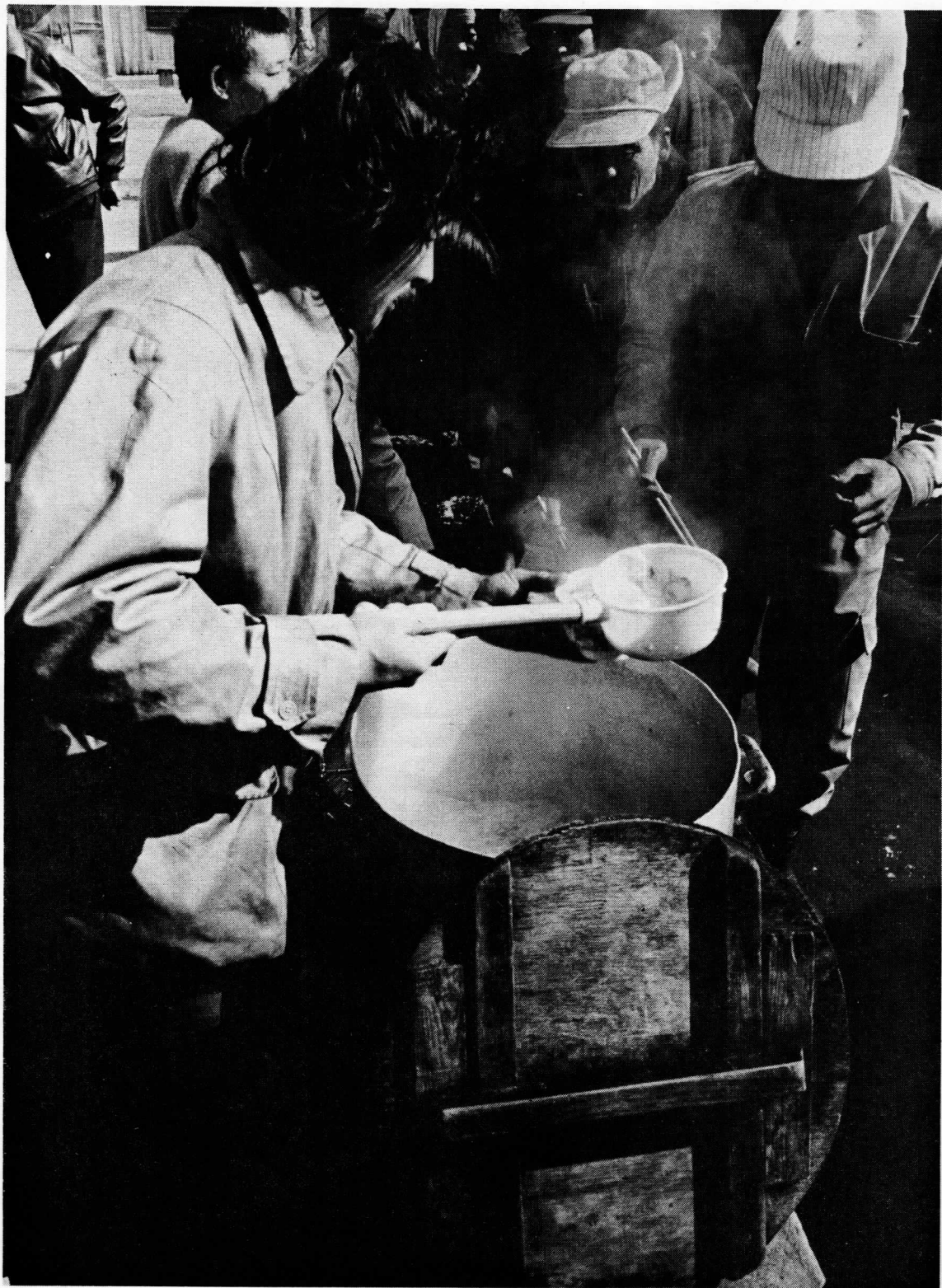
- 一、K U I M への越冬支援要請の基本線として

六月の声を聞く今夜もまた、「喜望の家」に集っているわたしたちの耳に、釜ヶ崎日雇労働組合の炊き出し前のアピールが聴えてくる。四月七日、大阪市による仏現寺公園代執行以後、炊き出しは、西成署うらの海道公園（いこい食堂前、喜望の家からは二一三〇メートル）で続けられている。

たしかに厳寒の冬は終わった。越冬闘争もそしてその支援も一九七七年二月二八日で終了はしたが、現実は何ら変わらないし、炊き出しを必要とする状況は何一つ解決されていない。

わたしたちの越冬支援は空しいのか。また単なる自己満足にすぎなかったのか。K U I M と協友会・釜ヶ崎地域問題研究会とが協働した二年目の越冬を終えたいま考えてみなければならぬ。

● 第七回越冬支援の目標



1977年 仏現寺公園の正月
(1977年1月1日・朝の炊き出し)

① 釜ヶ崎日雇労働者を支援する

② K U I M、地域研は、協友会と協力してパトロールを実施する

③ 行政への要望書、支援カンパの呼びかけを早急にする
二、研修会開催については、去年と状況がちがうので、協友会と調整する

三、各参加団体との調整から、「越冬を考える会」を拡大して、

十一月十四日(日)に集会をもち、各団体の意見を聞く
四、具体的な越冬対策の方法は、拡大「越冬を考える会」の中で決めていく

これらの基本的な方針が、十月二五日のK U I Mの例会でも確認された。十一月四日、K U I M、地域研、協友会三者の話し合いがもたれ、さきあげた目標が決められた。

もちろん、わたしたちの目標は、わたしたちの独自のものではあるが、その実、労働者自身による越冬のたたかいを労組などの団体とともに支援連絡会議の一員として支援するものであることは言うまでもない。労働者自身(第七回釜ヶ崎越冬闘争委員会)のたたかいの目標は次の三点であるが、この三点は、ここ数年来解决されてない。

一、仕事をよこせ——日雇労働者の就労の保障

一、病気の仲間を病院に入れろ——病人が、施設の不足または、個人の事情を理由に入院できない現状がある

一、花園公園を使用させよ——公園にテント村を作ること大阪
市は許可しない

これに対する具体的な支援として、さきあげたわたしたちの三

点がある。行政に対する要望は、労働者自身の要求に対する背後からの支援であり、炊き出しカンパは、仕事がない労働者への最底の連帯である。また医療パトロールは、行政の切り捨てに對して「死者を出さない」を具体化する行動でもある。

● 今年も労働者不在の行政

わたしたちは、十二月一日、次のような要望書を大阪市に提出し、十二月二日、その回答を民生局保護課生活係長足立氏に求めた。

一、釜ヶ崎の日雇労働者の人権を尊重すること

一、市民として対扱し、差別的待遇をやめること

一、東京都並みに越冬のために特別公共事業を興すこと

一、労働者全員を収容でき、生活保障ができるまで民主的に必要な宿泊所を開設すること

一、病気の労働者を完全に病院に収容すること

一、身障者に対する対策を講じること

一、老人に対する対策を講じること

十二月二日の話し合いで、足立係長は具体的なことは何一つ回答しなかったが、以来、一九七七年二月二十八日まで大阪市のよってなされた「諸政策」が、わたしたちへの具体的な回答だと受けとめている。

人権の尊重や差別的待遇について言えば、大阪市は、決して釜ヶ崎の日雇労働者に直接あって越冬に対する要望を聞かないどころか、常に警察力でその要望を排除してきた。その一例は、一九七七年一月四日、朝の大阪市への要求行動(七〇人参加)に対する市の対応(門前払い)ぶりによくみることができる。あるいはまた、一九七

六年二月二八日夜おそく、突如、マイクロバスで青カン（野宿）している労働者数十人を強制的につれていく（狩りこみ）といった暴挙も行っている。

特別公共事業については、大阪府・市ともどもに東京都とはちがうとの一言のもとに、一切出さなかった。同じ「革新」府・市政下ではあるが。

宿泊所は、例年の通り大阪南港の人里はなれたところに、臨時の宿泊所をつくったが、条件が厳しすぎて（徹底管理）、入れない人が大勢いた。とくに一二月末から一月はじめにかけては、宿泊所開設中にもかかわらず、連続一五〇人を越える青カン労働者があり、一月二日、午前二時には二〇六人を記録している。この数字は、そのまま市の宿泊所が、形式的な対策であったことを物語るし、とくに青カン者の中に、老人、障害者、病人が多かったことは、もっとも必要な人々に、民生行政が行きわたっていない証拠でもある。

病気の労働者については、医療に関する詳しい報告があるので、それにゆずるが、結核の労働者に対する行政の対応の中に、釜ヶ崎労働者きりすての姿をみる。また諸医療機関も、なおたら働けるという労働力としての労働者への医療には熱心ではあるが、人間としての生きる権利を主張する労働者の生命には無関心ないしは無視である。それが、老人、病人、障害者きりすてによくみることができさる。

しかし、大阪市の民生行政の矛盾が白日にさらされたのは、仏現寺公園の小さなテント村に対する強制代執行のときである。二月十五日、大阪市はテント村の強制撤去を通告してきた。それに対し、越冬実をはじめ、支援団体は、大阪地方裁判所民事部に、執行停止

を求める訴訟を起した。つまり、この不況と寒さの中で、労働者の生命と生活にとって公園を使用することが必要か、それとも市の言う「公園の原状回復」に名をかりた労働者の追い出しと大掃除が必要かという訴訟であった。言いかえれば、労働者の生命か、市の言う秩序か。大阪地裁民事部は、理由にならない理由——正面から労働者の生命と生活にとりくまない——によって、秩序を優先させる判決を出した。それにのった大阪市は、一方では地域住民の要求（ドヤ主とか酒屋とかとにかくここで労働者によってその生活をささえてもらっている住民たち）ということで、四月七日、午後二時から二〇〇余の機動隊にまもられてテント村を撤去した。（ルポは「釜だより」第六号参照）しかも一定期間改良工事と称し、公園の使用を禁止したあげく、公園のまわりに高さ二メートルばかりの金網をはり、扉をつけ、ご苦労なことにそれに施錠までしている。施錠された児童公園では、昼間と言えども児童はだれひとり中であそべない。あきらかに、釜日労対策である。何のための公園か。市みずからが、都市公園法に違反していると言わねばならない。

● 炊き出し一〇〇万円カンパの意味

今年の炊き出しには、資金をカンパして支援することが決まり、全国の諸教会、学校に二度、カンパの依頼状を出した。第一回は十一月、第二回は、一九七七年一月であった。一〇〇万円目標額はみなさんの協力で達成された（会計報告参照）。炊き出しそれ自体ではなく、資金カンパに協力したことは、昨年度のようにただ弁当をくばる活動から一歩ふみ出そうという点にあった。炊き出しの意義は十分認めるが、今年はもう少し角度をかえて越冬にかかわろう

ということである。

炊き出しは、日雇労働組合が中心になり行われた。期間中（一九七六年一月二十五日～一九七七年二月二十八日）は、朝九時、昼一時、夜七時の三食が出され、利用者は延べ一万三〇〇〇人を越えた。カンパは、炊き出しの一部ではあるが、他の支援団体や労組のカンパ同様、重要なものであった。

さて、わたしたちは、このカンパ依頼を単に、炊き出しの資金集めとみるだけでなく、カンパ活動が、釜ヶ崎と教会との重要な交流と考えた。年々、釜ヶ崎の矛盾が、不況等により激化するにもかかわらず、一般には知らされていないとき、カンパ依頼と一緒にとどけられる釜ヶ崎の現状報告は、一つの情報として重要ではないか。また、この現状報告は、釜ヶ崎が、全く孤立無援の存在ではなく、一般社会の延長線上に確実にあることも認識する一助にもなる。その意味で期間中に、わたしたちは近隣の諸教会にカンパを呼びかけるとともに、この活動に具体的に参加してくれるよう呼びかけた。また、中間報告会を一九七七年一月二三日西成教会で催した。あるいはまた、出来るだけ、キリスト教関係のマスメディアにもアピールをのせた。その結果、三〇〇件（個人および団体）から現金や衣料のカンパと激励の手紙がとどいた。

● なぜ夜間医療パトロールを行うか

越冬の最も重要な課題は、「死者を出さない」である。炊き出しもそれへの一手段であるが、夜間の医療パトロールは、さらに直接的な手段である。残念なことに越冬にはいる前、すでに（二月八日）三人の死者（行路病死）を出したが、期間中もわたしたちの身

近かなところで五人の労働者が、死んでいった。年間、釜ヶ崎およびその近辺では三〇〇人の行路病死が出る。医療パトロールは、零度前後の厳冬のなかで一枚の毛布もなく青カンする労働者を発見し、仏現寺公園のテント村へ保護すること、火傷やケガなどの臨時の手当が目的であった。青カン者は、他の統計（「医療レポート」の統計参照）でもあきらかなように一日平均一四〇人近くいる。その中で、このまま放置すれば、行路病死すると判断し、公園へつれてきたものが三〇七人におよぶ。また、救急車で、病院へはこばれた者は、一日平均一人の計六〇人となる。このようなパトロール活動は、越冬闘争委員会、労働者、支援の諸団体の三者により前半は（一月一六日まで）午後八時と午前二時、後半（二月二十八日まで）十一時に行われた。参加者は毎回三者で三〇人を越え、北コース（浪速区水崎町中心）と南コース（釜ヶ崎中心）に分れ、約一時間半行われた。

パトロール隊は、ライト、医療箱、衣料、リヤカーをもって、青カン者ひとりびとりに声をかけながら一巡する。パトロールは、釜ヶ崎の冬の現実を知るときであり、また労働者との交流の一時であった。労働者は、青カンの経験者であり、どこに青カン者がいるか的確に示した。最も青カン者が多いのは、三角公園であったが、八時のパトロール時の青カン者は、三角公園の場合、主として、バクチなどの参加者であった。もちろん、宿もなく、たき火にあたっている者もいたが。二時、十一時発見の青カン者は、まさに青カン者で無一文者が多かった。しかし、年末には、飯場から帰ってきて、現金は持っていたが、シノギ屋（西成路上強盗。二～三人集団で、金を持っていそうな飯場帰りの労働者を飲み屋でみつけ、その帰途

をおそい金をまきあげる。本人も少々酩酊なので、記憶がはっきりしないときもある)にやられて負傷し、金をとられた労働者もかえよう。シノギ屋について言えば、夜の釜ヶ崎は、無法状態といえよう。シノギ屋による被害を警察署にとどけても、むしろ「お前が悪い」とたしなめられる始末である。まさに弱肉強食が横行している。と同時に、労働者相互間の助け合いもあまりみられなかった。ある労働者は、糖尿病により火傷していてもその痛みを感じないため、たき火の中に長靴のまま足をつっ込んでいたが、周囲の労働者は、それを引っぱり出すことさえしなかった。またすっかり衰弱した労働者をリヤカーにのせるときも、「お前ら勝手にやっとなやろう」との調子で、手助けを求めても知らん顔の場面にも幾度か出あった。これなどは、分断と支配の徹底であって、労働者の連帯は確実に破壊されている。

このような状況のなかで夜間医療パトロールに求められるものは、生命をまもるたかいたと同時に、労働者相互の助け合いの場の形成ではないか。そして、この相互の助け合いの場の形成がなければ、医療パトロールは、善意の押しつけに終始することになる。わたしたちは、この課題にどれほど取り組みえたか、また近づきえたかどうか。

● これからの二・三の課題

越冬を終えたいま、わたしたちの脳裡を去来するのは、釜ヶ崎は、日本の資本主義社会の矛盾が、最も典型的に露呈している場であるとの認識である。それは、もはや一片の行政的な措置ではどうにもならない。それだからこそ、矛盾の隠弊に警察力を行使する。

また、極度の抑圧は、労働者の怒りを爆発させるので、たとえばキャンブルに対しては、片眼をつぶらざるをえない。

しかし、市民社会一般も決して釜ヶ崎とは別世界ではない。むしろ、同質のものであるが、その矛盾が高度に管理されていて見えなだけである。わたしたちは、むしろ釜ヶ崎の中に日本そのものを見い出さなければならぬ。また同時に市民社会の一つ一つの現象の中に、釜ヶ崎を見る想像力を養わなければならぬ。越冬にかかわるとは、その矛盾の中へ一歩、具体的に足をつっこむこと以外、のなにもでもないと言えよう。その意味で、越冬のたたかいは、労働者にとってもまたわたしたち支援の人間にとっても自己変革のときである。このような認識は、またいくつかの課題を越冬が終ったいまなお、わたしたちに課するのである。

その一端をわたしたちは、地域研の諸活動を通じ、いささかなりとも担っていかうと考えている。その活動計画は「釜だより」第六号にあるが、ここでは二・三の課題をあげておきたい。

一つは、自己変革の場としての労働者学校、識字教室、労働者交流会などへ教育Vの場の形成である。しかし、この自己変革に求められるのは、両者が相互にへ教えるVへ学ぶV立場を共有することである。しかも、このへ教育の場Vは、労働者自身のたたかいたとえば賃金末払い、不当労働行為、生活の諸権利獲得のたたかいたなどを軸にした臨場的なものであることが求められる。

次は、越冬の医療活動の継続としての病院訪問である。今日まで、すでに五回、地域研の医療グループを中心に釜ヶ崎労働者の入院先を訪問したが、種々な課題をあたえられている。たとえば、施設の不備、釜病陳あるいは釜病床という差別待遇など、釜ヶ崎の外にお

いても「釜ヶ崎」は生きています。これらに今後、具体的にどう取り組むかも重要な課題と言わなければなりません。

いま一つ、わたしたちの活動は、キリスト教会を媒介にして市民社会とつながっているという点である。今回の越冬が日本福音ルーテル教会の希望の家を拠点にできたことは、諸活動をかなり円滑なものにした。この家を通して、わたしたちは、プロテスタント教会とカトリック教会が出会い、またキリスト教界以外の人たちとも交

激励の手紙

*

主の御名を讃美いたします。

冬の寒い夜など布団に入って、私たちはこんな暖かい所にいられるのにとすると、つらく思われる事もあります。世の中にはまだ多くの人々が、多くの人々の暖かい援助を必要としております。そういう人を知ると心が動きます。しかし私の力は弱く、貧しいのを思うと数多く献金も出来ません。今、正に生命の危機というところに送る事にしました。東京の山谷においては、年末一時金なるものを東京都が支給しておるということ、大阪においてはいかがでしょうか。

今年の十一月に川越に引越して来ましたので、近所の方に働きかけることもあまりできません。ここにお送りするのは、私どものものだけです。少ししかありませんけれど、この中で使えるものがありません使ってください。

私は遠くにいて、何も出来ませんが、越冬キャンプで奉仕していらっしゃる皆様と、あいりん地区の労働者の皆様の健康をお祈りいたします。

代田 明美(埼玉)

*

「信徒の友」で、釜ヶ崎の越冬キャンプの記事を見ました。昨年、「寿町・自由労働者の町」という映画を見、この不況下、

流できた。そのみならず東南アジアやヨーロッパ、アメリカの人たちとも出会うことができた。これは大きな収穫である。

わたしたちの願いは、まず何よりも釜ヶ崎がかかえる矛盾を日本諸教会が共有してほしいということにある。それは、また教会がおかれていた地域社会のもつ矛盾への認識でもある。この共有や認識が、教会の自己変革を可能にするのではないか。

小 柳 伸 顕

職もなく、特に皆が楽しく過ごすお正月が、日雇い労働者にとって一番大変な時期なのだとわかりました。つい先日テレビで「山谷のカルテ」というドキュメンタリーをやっていました。

私も数年前、東京で働いている時、大病をして、倒れた経験がありますが、今日、特別養護老人ホームで働いており、労働が大変ですけれど、毎日の糧が与えられ、良きキリスト者と交わることができ、感謝しております。福祉とは、施設だけでなく、あらゆる場所で援助し、助けあわなければならぬことを感じます。少額ですけれど、どうぞ役立ててください。

明智 千加子(静岡)

参加者の声

◇

「あなたは自分のしていることがよくわかってるのか」また別の人からは「あそこに安住している人があるかもわからないのに、よけいなおせっかいではないか」と、私が釜ヶ崎に関りを持つようになってからきかされた批判である。この二つの言葉がいまも私に重い問いを私に投げかけている。釜ヶ崎にのめりこんだら貴方自身が台なしになる。それ程問題は困難なのだから、生半可な気持ならやめた方がよい、というのが第一の問いであり、第二のはそれこそ、人には天命のようなものがあり、それに手をつけるのはよけいなことだという問いである。私は思っている。

それにもかかわらず私は釜に関りを持つうとしてゐる。私の生来の世話好きからきているのかもしれない。私はいま年金で生きている。家内と二人死なぬ程度にめしが食えたらそれでええ（但し家賃はいらない）と思っている。しかし自分だけが生活の基盤を確保しながらの、片手間仕事みたいに、釜の労働者と関っているのではないかという、或る種の後めたさみもないものも感じている。

慰めみたいなものもある。労働組合の機関誌が、釜ヶ崎ルポみたいな拙文を取り上げてくれた。リーダーにOBとして参加したら、大学出の若い友人が私の記事を読んで感動したといってくれた。少しだけうれしかった。他にどんな反応が出るか少し楽しみにしている。

問題が周囲に余りに多いので、その中の一つだけを取り上げることは、組織に出来ない。組織というものは、態をなしてしまうと内部志向的になってしまふ。若い労働組合運動家のなげきの声みたいなものもきいた。

教会はその点で非常にゆるやかな組織態をなしているので大変自由な活動ができる

利点をもっているらしい。それだからこそ越冬支援にあれだけの金と物がよせられるのである。これは私の教会についての新しい認識である。

五月五日に病院を二つ訪問した。病院によって、同じ患者の扱いに天と地程の差があるのを見てショックを感じた。整った設備とやさしい人の心に囲まれた患者の表情は明るい。が、雑居房みたいな処に押しこめられたような患者達の表情にやりきれない感じを持った。

なまじかけるなうす情という歌がある。その通りで人間の出来ることに限界がある。それを承知の上で、悲愴的にもならず、落胆もせず、こつこつやっていく。「たとえ冷たい水一杯でも与うるものは……」というイエスの言葉に慰められて。私はこう思っている。

◇

田中 豊

いこい食堂の前にある秋の茶屋公園に、最近、ロータリークラブから太陽時計が寄贈された。この公園は市当局によって、ここ一年ほどの間にみちがえるほど整備され、国旗掲揚のためのポールまである釜ヶ崎の

中央にある公園である。そこに先週から、その美的センスをうたがわず大きな立札が二枚たてられた。一枚は時計台のすぐ近くにである。

越冬がおこなわれた仏現寺公園などは、最近、公園全体に金網がはりめぐらされ、入口は、たったの一カ所で、その人口もドアでいつでも閉鎖出来るようになってくる。これは、公園とはいいがたく、まさに「人間動物園」としか釜ヶ崎に住む人間をみていないといつてよいのではないか。私は越冬の期間をとおして、釜ヶ崎の労働者が人間なみにあつかわれていないということに怒りを持った。

たしかに問題を持っている人々が多いということは否定出来ない。しかし、労働者に接する役人や警察官などの一部には「人間は、だれでも生きる権利がある」という「生命の畏敬」の念が欠けているのではないかと思わしめる点がある。

炊出しは仏現寺公園が四月七日、大阪市の代執行によって封鎖されたあと、萩の茶屋公園で、現在も行われている。毎晩二十〜三十名ほどの労働者が、午後七時から藤棚の下に集まって来る。かつての歌人は、「我が宿の、池の藤波さげにけり、山ほと

ときす いつかきなかむ」と、初夏の藤波をみたが、ここにつどう人にとっては、そんな心境にはなれないだろう。ここでは越冬によって、生きのびた人々が「春闘」を展開しているのである。

この炊出しは、おそらく、春から、夏に、そして、秋と進められることである。いまのままで、終りなき越冬が展開されているといつてよいだろう。

そうすると、「越冬問題」は、冬期の寒さがきびしいという、特殊性はあるにしても、釜ヶ崎におけるごく普通の事柄であるということが出来る。日常性の問題といつてもよい。

そこで「越冬問題」についての発想の転換が必要になってくる。

労働福祉、民生福祉問題の年間の闘いのなかで、「越冬問題」をどう位置づけるかということになる。

秋風がお互に身にしみわたる頃になって、さて、今年の越冬をどうするかというのでは本来的な労働運動にはならないのである。

越冬のささやかな経験のなかで、釜ヶ崎には、身体の不自由な人、病気の人が多いことを知らされた。それにしても、越冬の働きから、医療を考える会が発足し、病院

訪問、医療そのものを考え、更には自分たちの健康について考えるグループが出来たことは、喜ばしい限りである。

金井 愛明

釜ヶ崎へ来て、一カ月余で、これに参加させてもらった。何もわからないまま、只もつと人々を知りたかった。確かに少しは知った。

こんな事もあった。初めての夜、パトロール中、同行の労働者が「ウーウ」と唸り出した。見ると、寒いのにオーパーもジャンパーもなしで、一本のタオルで頬被りしている。酔っているらしく、後れがちな千鳥足を踏みしめる様にして従って来ている。さっき迄焚火に当たっていたのだから、どんなに寒い事だろうか。寒さで体中から絞り出る唸り声だ。少しして見たら、頬被りを外している。「頬被りしたらいいのに」。いやー、わしもパトロールしているんだから、みんなの様にきちんとせんと。気張って従って来ている。

公園に着いたら、消えかけている焚火の中に、三人の男が体を丸めて倒れる様に寝ていた。顔が灰の中にあり、全身、灰被りだ。「もしもし」体を揺ったが動かない。

唇の辺が火傷している。さっきの同行の労働者が、耳を引張ったり叩いたりして反応を見ている。「死んでる」「まさか」と云って脈をとる。「大丈夫」寝ていた男はもぞもぞ動き出した。突然に、他の一人が寝てるままでわめいている。「貴様等に殺す権利あるんかよ」「違うのよ、ここは寒いでしょ。夜明けになったらもっと気温が下るから、布団のある処へ行きましよう。でないと死んで了うわよ」しーんとする顔がこちらへ向けられた。「おっかさ、わしなあ、あんたを知っている。阪和病院にも来てなあ。布団の処へ行くよ」リヤカーに乗せてからも、「おっかさ、わしなあ」を繰り返している。

初めは、うさん臭く見られたパトロールの行列も、女の私達に何かできるだろうかと云う懸念も、参加してみても消し飛んだ。私はここで本当に尊いものを見せてもらった。人間の惨さを、それ以上に人間の限らない美しさにも触れさせてもらったと思う。越冬対策そのものは確かに終わった。季節も冬を終ったが釜ヶ崎はまだ冬である。それに、この夜の異常さは昼の異様さにつながる事を思えば、昼をこそ人々と共に住みたいと思う。

シスター・石戸

西成ベビーセンターに勤めて三回目の冬。はじめて越冬の夜間パトロールに参加した。途中参加だった。出る中で何かつかめるんちがうか、という思いが勝つての参加だった。自分自身の寄って立つべき基盤の不確かさのみが、ズシンとこたえた。この問題をどこまでひっかまえられるか？それなしに冬期のみ、越冬に参加するとは、どういう意味を持つのか？考えこまざるをえなかった。

今の私の心は、一個の人間の自立の大切さ、難しさということが、大きな位置を占めている。人間が、変ることなしに体制を変革しえないのではないか？ということ：……。だから今の私は、資本主義打倒というスローガンのもとに動くことにギャップを感じはじめています。

しかし現実的には、資本主義体制の矛盾に吹きさらされている釜ヶ崎があるということも逃がれようもない事実として胸にひびく。

自分、私は、この釜ヶ崎の中で模索を強いられているようだ。

越冬の期間中、入院された人たちの病院

訪問という動きの中で、自分の方向を見つけてゆきたいと思っている。

岡崎 美智子

一九七七年一月一日午前二時、夜間医療パトロールにて釜ヶ崎一帯を巡回、青カン者数二〇六名を確認。はなやかなはずの元旦の朝、釜は辛波に満ちた越冬のただ中で新しい年を迎えた。医療箱を持ちリヤカーを引きながら「仲間うちのことば仲間うちで解決しよう」との青カン労働者有志と幅広い支援者は、越冬の釜の現実に立ち向った。その間の労働者との対話やさまざまな出来事に直面する中で、今だ春が訪れぬ越冬の釜に熱気を送る第三世界の人々の連帯をたき火の炎に感じた。パウロ・フレイレ著「抑圧された人々の教育」という本が伝えるものがそれである。

フレイレの教育哲学は、ブラジル北東部における識字学習運動の実践を通じての人間解放のための提言がその内容であり、飢えと貧困と無知に追いやられている第三世界ばかりでなく、高度に発達した技術社会への厳しい告発でもある。

人間の存在論的使命は、すべての人間が

この世界において行動し世界を変革する主体として存在することであり、そのことにより個人的にも集団的にも豊かで満たされた生命の新しい可能性へ向う運動体として存在することである。人間が深く関わっているこの「世界」は、押しつけられ順応させられる／＼与えられた「現実」のように静かで閉ざされた秩序でなく、むしろ人間によって変革され解放されるべき課題なのである。今多くの人々が抑圧され「沈黙の文化」に埋没させられている。「人」として存在するのではなく、抑圧者の「物」として単に（ただ）生かされているのである。抑圧社会を維持させ単なる対象物として適応させられる矛盾から解放されることは、対話的・出会いにより可能となる。他者との相互交流による対話的・出会い、この現実を知覚し、自らを認識し、批判的意識に目覚めること（「意識化」）により、この世界の変革への運動へと向かうことができる。まさに歴史構築者としての責任主体として。ブラジルの農民たちは相互交流、問題提起型の学習を通して新しい希望に奮起させられる。「以前にことばは意味がなかったが、今ことばは私に語りかけ、私はことばを語る。」「私は働き、この世界を変える。」……と決意する。

釜の閉塞状況（手配師、暴力団、大企業、警察、行政による包囲、暴力、支配監視）の中で「沈黙の文化」により労働者は追いつめられる。釜の労働者はいかにして彼らの熱気をつなぐことができるか。そして越冬支援のさまざまな過程を通しての相互交信は、解放の道を拓くことができるか。

（未完）

注：紹介書は Paulo Freire, *Pedagogy of the Oppressed*, Herder And Herder New York, 1970 でポルトガル語の英語版です。解題が釜ヶ崎地域問題研究会発行「釜だより」6号より連載される予定ですので併せてお読みいただければ幸いです。

◆ 背振 一而

釜ヶ崎の越冬問題にかかわって、三度になるが、今回ほど、鮮烈な実体、ふれさせられたことはない。

釜との関係は協友会を通じてですが、関心はそれより以前、金井先生が東四条のアパートに住む頃からでしょう。貧しい低辺の人間としての愛着が、必然的に近づけるであろう。

その後、釜に生活して活動する仲間がふえ、四五年のクリスマスの行事が終わった頃の集会で、協友会ができたのだと思う。

越冬問題に直接関係したのは、四九年の不況時の越冬からで、民政局の越冬臨時宿

泊所の運営委託を受け、紆余曲折を経て一二月二九日より翌一月五日朝迄、多くの協力者と共に経験したことは、新しい体験となり、釜における行政の姿勢や、警察の強圧を強く認識した。その後の集会で、行政の宿泊所が終っても、越冬は終わらない、テント村の労働者は増える傾向であることが、越冬実との接触でわかり炊出しの支援を実行することが決り、一月一五日の夜食から始め、行政代執行により、テント村が消滅させられるまで続けた。

翌年は、K U I M のメンバーが主体となり、越冬実と協力のもとで、前年実施した炊出しを行い、協友会もこれを応援した。

今回は、行政側の増々厳しい圧力のもとでの越冬となり、K U I M や地域研の精力的な活動によって、労働者の援助と、夜間パトロールが実行された。昨年より協友会のメンバーは、自己活動や、集合体の弱さで、越冬活動も消極的なものとなり、若い地域研や K U I M に主動されて行動したにすぎない。

今後は、新しく協友会の構成メンバーとなった、地域研や K U I M とともに、貧困と抑圧の中にもうめく釜ヶ崎を、より多くの人達の理解と協力によって、平和と希望の街になるよう共に頑張りたいと思う。

谷 安郎

◇

この四月から釜ヶ崎で活動を開始する予定の私は、そのよき準備の時とも思い、二月下旬、機会をえて釜ヶ崎越冬支援活動に参加した。とは言え、たった一晚の体験をおしなべてものを言うことははばかれるので、ここでは、きわめて個人的なことを述べるのを許していただきたいと思う。

その日はあいにくの雨で、ガッカリした気持ちで夜間パトロールに出かけた。が、むしろ、情況はその反対だった。その夜、パトロールが終った午前二時までの間、路上や軒下で野宿している人は百三十人をかぞえた。私と労働者がリヤカーで医療センターの軒下へ保護したのは七人だった。明朝まで放置しておけば、おそらくここえ死んでしまうだろう。

この地区内の求人は万国博景気の昭和四十四年と、列島改造ブームの四十七年はいずれも年間七十万人を突破したが、五十年年度以降は三十万人台に落ちこんでいる。それにもなつて仕事にあぶれ、一泊四百円のドヤ代が払えずに寒風吹きすさむ路上に野宿する労働者の数はうなぎのぼりに増え、明日の仕事のあてもないまま、吹きさらし

の路上で死んでいった人たちが三年連続五十人を突破しているとのことなのだ。

私と労働者がリヤカーを引いていると、あるおっちゃんのマフラーが車輪にからまってとれなくなつてしまった。仕方がないので、いく重にも巻いたマフラーをおっちゃんの首からはずすと、何と臭いこと。私が思わず顔をしかめていると、おっちゃんはい目をあけて「なぜで動かれへんのや。ありがとう」と両手を合わせるのであった。私は深く自分を恥じいった。

釜ヶ崎の歴史をみると、この地区は日本の吹きだまりとして発生し、時の体制はたえず臭いものとしてふたをしてきたのだ。

私は、この越冬支援での体験をたえず新たにし、今後は自分が生活し、自分の子どもたちが成長していく場として、この地区の問題を内部からこたわり続けていきたいと思う。と同時に、私たちの生活にふたをかぶせようとする力をはね返し、心ある人たちとの連帯を強めてゆきたいと思う。

重野 信之

◇

「病院を訪問」するでしょうか、病院に入院された患者さんを訪問するのでしょうか、と「両方は必要です。」と……

そうであれば、それでは……

集める場所……：喜望の家

日、時間、S・五二年五月五日、十時

という予定でしたすけれども、おくれで来られる人はいつもあります。十人を待たせても、日本の人たちが一人も一つの文句も言いません。平気ですかこの人たちが、ルーズですかこの社会は？

出発 方向は？そうですネー一度東を向いて、細かいことは後で見ましよう。祭日、雨が降る日。車は少くない。ウチの車が案内ススムに走っています。

A、病院、大阪の真中の私立の病院。受付ー白いカーテン、だれもいません。もちろん祭日だから。この廊下は、狭い、暗い、何か事故が起つたら、大変です。でも、人がいない見たいです。

二階に上がります。看護婦のも、受付と同じように、窓を閉めて、白いカーテンをちゃんと、閉めて、とにかく、きょうは休みです。お医者さん、ケースワカ、もちろん、いません。きょうは休みです。

患者さんはいたい結核です。男の人です。入院は長いです。皆、点滴がついてい

るままにあらへ行ったり、イヤ、皆でなくて、ある人たちがその点滴のびんを自分で取って、捨る、中の薬はいくら残っているとも。

一間の部屋には四つのベットが入っています。ベットの中に、ベットの下に、ベットとベットの間には荷物があります。入院は長いだろう。部屋の真中にストーブがあります。火がついていません。「どしてでしようか」と聞いて、「自分で石油を買わんだから」と患者さんたちが言われます。(この病院を冬に訪問しました)

B、の病院、大阪の外です。昔は学校でした。そのまま残っています。一つの教室には十五人ぐらいのベットが入っています。何十年の建物でしょうか。子供の教育のためには、もういけませんでした。ですから、結核の患者さんであれば、まだまだいけます。受付の窓がいています。「お名前を書いて下さいませんか」と、面接の本をあけると、びっくりする。先週の私の名前ときょう私の名前は一列になります。一週間の間、この病院の何百人の患者さんが、だれも、面接や訪問来ませんでしたか? そうです!

「先週先生が来ましたのちに、こちらの病院の全体が変りました。お医者さん、看護婦さん、皆、先週から親切して下さい」と訪問された患者さんが言われる。

C、の病院、畑の真中に、ゴツイ建物、広い車道、両側に桜並木道、左手には大きな看板がありました。「看護婦を募集」それほどあたらしい病院ですか? 永続のことでしょうか。中へ入っても、広いです。設備はよろしいです。これはほんとに患者さんのことを考えて、病院、病室をつりました。二人または四人の部屋ばかりです。

「この病院では『金病棟』はありません。保健の患者も差別にしません。」と

「この病院は十二月入院をして、もうすぐ半年になります。これで九回目でした。いつも自己退院しました。」

「どうして——」

「退屈だもん、体はだいいじよぶだと、それから、また働きたいなんです。」

「何か欲しい物ありますか。」

「べつに——果物でしよう。」

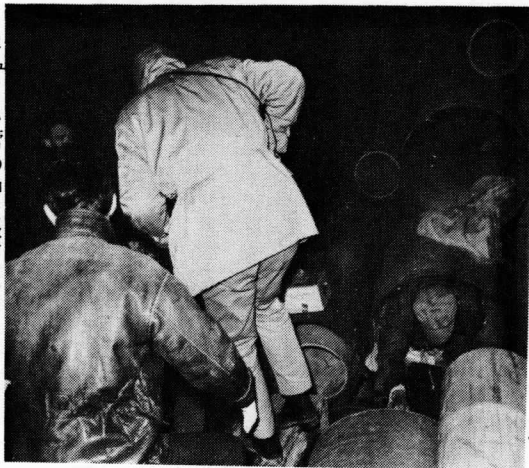
「手紙がきたら、うれしいでしようか。」

「それはうれしいことでしょう。それならば絶対返事します。」

これならば、一つのたのしみになるでしようか。これだけの喜びは、また一つの生き甲斐のある生活になるでしようか。これだけでは諦める気持をなおすでしようか。それができるならば、体もまたなおす見通しが生まれるでしよう。

ただ一通の手紙のために一人の一生を救われると思いません。けれども、一通の手紙ではじめましょう。(原文のまま)

E・ストローム



ヒューム管の中に寝ていた

労働者を保護

(一九七六年二月)